「予科練」第462号　令和3年1月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

予科練

No.462　令和３年

1・2月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.4… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…… 3
○名刺広告…… 4
○三四三空隊史④…… 6
○土空から八十年後…… 8
○たったひとりの慰霊祭…… 10
○私の昭和史④…… 11
○翼を奪われ陸戦特攻隊へ①…… 13
○雄翔館見学者所感…… 16
○死線を越えて①…… 21
○寄付者芳名簿・事務局日誌…… 23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず

高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
教練せし
きみらぞなく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　予科練の碑　No.4

予科練の教育航空隊は終戦までに、十九ヶ所を数える程に航空戦術に対する中央本部の考え方が変換された、毎年一万人以上を養成する事が、昭和17年度戦時海軍軍備計画により大量採用が始まり、土浦、三重の両航空隊だけでは収容しきれない事から、各地に建設されここ鹿児島には、元々鴨池に水陸両用飛行場があって、海軍が艦隊の航空基地として使用し、南方への中継基地としての重要な役割を果していた隣接地に、昭和18年4月に予科練の教育航空隊として開隊された。教育を受けたクラスは、予備学生は14期、予備生徒は1期と2期で甲飛は12、13期、乙飛は、20、21、22、23、24期で学んだ若人は二万三千余名でこの中には朝鮮、台湾の一部の志願兵（特丙飛）も教育を受けている。貴様と俺の碑は41年に、赤心の碑は51年に鹿児島空在隊者等で建立された。

鹿児島海軍航空隊　隊歌

朝日に映揺る高千穂の
聖き姿をふり仰ぐ浪朝若き飛行帽
希望は溢る空万里
無敵の栄誉堂々の
鹿児島海軍飛行隊

貴様と俺の碑

赤心の碑

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

書簡

（佐世保海軍航空隊から）

神風特別攻撃隊九三一空
菊水雷桜隊攻撃二五一飛行隊
海軍一等飛行兵曹
大武節雄
十九歳
茨城県

第十二期甲種飛行予科練習生

拝啓、その後ご無沙汰致しましたが、お変わりはありませんか、こちらは朝夕、寒さを感ずる日が多くなって参りました。それでも家の方よりは、大分暖かいようです。霜も降りません。

私はすこぶる元気で、今月は体重が二キロふえました。そちらは寒くなる一方と思います。

ご両親とも風邪などひかぬよう、ご自愛下さい。

昭和十九年十二月七日

御両親様

昭和二十年五月十一日、天山艦攻に爆装80番を登載して、〇五〇〇串良基地を十機編隊で沖縄周辺敵艦船攻撃に発進して突入戦死する。

謹賀新年

新年のご挨拶

公益財団法人　海原会
理事長　菅野　寛也

謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

只、例年と異なり、コロナの影響等でお正月気分が一寸浮かれてはいけないと思うのが真実で、令和二年度「海原会の慰霊祭」も小林会長を始め、数人の役員のみの参列で開催されたので英霊の御魂も淋しがっておられたかも知れません。

また、旧年中に歴戦の勇士も何人か旅立たれたのが残念ですが、残された私達が先人の功績と遺志を後世に伝えるべく頑張らねばならないと決意する次第です。

しかし、最近次第に御遺族、或いは関係者の熱意が表面に出てきているような気が致します。やはり日本人には熱い血潮が流れているのだと信じております。

そして「鎮魂、慰霊無くしては、和解、世界平和はあり得ない」と信じ、私も微力を尽くす所存です。

新春に当たり、皆様の御健康とご多幸を、お祈り申し上げます。　令和三年　新春

公益財団法人
水交会

会長　赤星慶治
副会長　佐賀幾雄
理事長　杉本正彦
副理事長　河野克俊
専務理事　村川豊
事務局長　長谷川洋

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長　杉山蕃
理事長　藤田幸生
副理事長　岩崎茂
専務理事　石井光政

公益財団法人
海原会

理事長　菅野　寛也（一般）
会長　小林　和夫（乙19）
副会長　太宰　信明（甲14）
顧問　池　太郎（一般）
副理事長　酒井　省三（一般）
副理事長　安井　剛（一般）
専務理事　平野陽一郎（一般）（事務局長）
理事　徳永　三好（甲13）（霞ヶ浦支部長）
理事　保坂　俊雄（乙23）（広報担当）
理事　篠田　輝男（一般）（事業担当）
理事　山下　桂子（一般）
理事　湯原豊一郎（一般）
監事　豊岡　昭（甲16）
参与　行方　滋子（一般）
参与　脇田　四郎（甲13）
参与　早川　昭二（乙21）

賀正

(公財)海原会・理事長
零戦愛好会・会長
菅野寛也
〒425-0065 静岡市焼津市東草深町一一五
☎〇五四一二四五一二五二八

(公財)海原会・評議員
三重空甲十二期会・代表幹事
久保山賞一
〒116-0014 荒川区東日暮里五一六一一九〇九
☎〇三一三八〇七一六〇二六

(公財)海原会・評議員
予科練二十四期会世話人代表
岩舘芳雄
〒189-0002 東村山市青葉町三一三三一二八
☎〇四二一三九二一四五七一

予科練特飛十期会会長
佐藤建次
〒234-0051 横浜市港南区日野四一四三一一二
☎〇四五一八四二一三六七二

(公財)海原会・監事
土空甲飛十六期
豊岡昭
〒125-0052 葛飾区柴又四一十三一十八
☎〇三一三六五七一〇九七二

(公財)海原会・理事
三重空二十三期会会長
保坂俊雄
〒182-0001 調布市緑ヶ丘一一四四一三三
☎FAX 〇四二一四八六一四七八八

「人と自然が作る楽しい」
茨城県稲敷郡阿見町

東洋一と言われた霞ヶ浦航空隊に、若き雄鷲の声がこだましました。

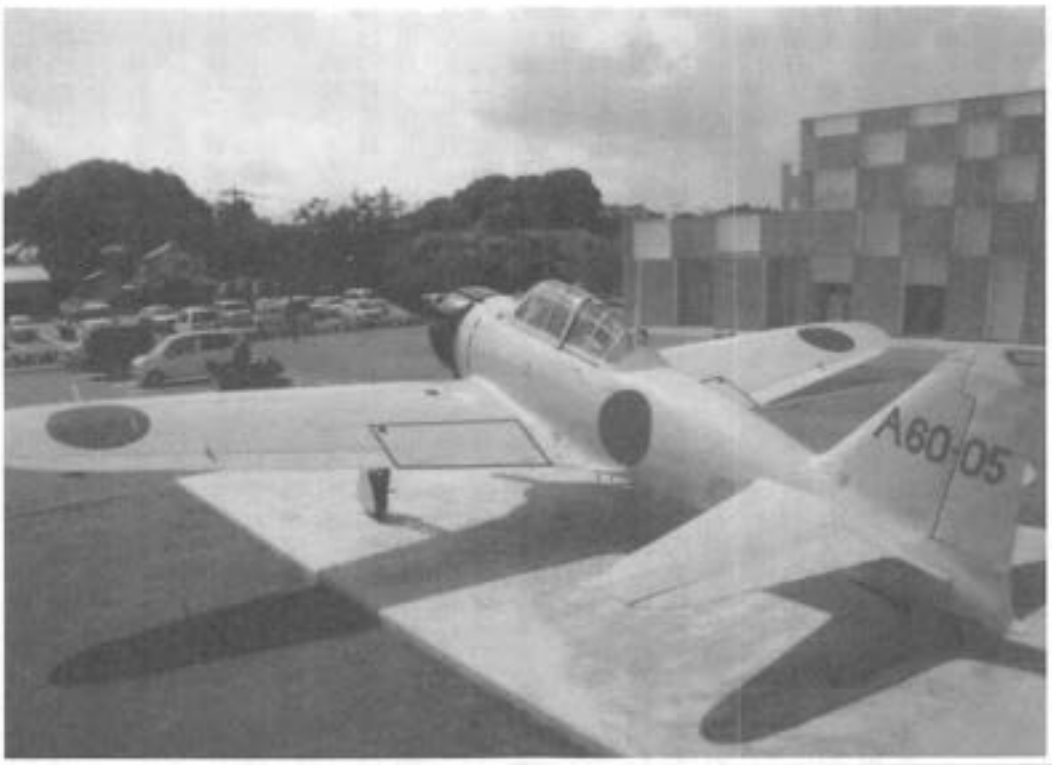
土浦海軍航空隊は、いま人口四万七千人の町の大きな歴史財産になっています。

阿見町は、現在福祉、緑の保全、生涯学習などに力を入れ、住民参加の町づくりを、積極的に進めています。

穏やかな霞ヶ浦、町中にあふれる桜の花が、今も静かに鎮魂の意を捧げています。

予科練の歴史を後世に寄与するため、阿見町は「霞ヶ浦平和記念公園」を整備し、平和のシンボル「予科練平和記念館」を建設し、開館しました。

平成二十二年二月一日



三四三空隊史④

七〇一飛行隊開隊前後

中島大次郎　七〇一要務士

昭和十九年十二月末

戦闘七〇一坂井三郎少尉の操縦する九〇機練に便乗し、宮崎基地を発って、一五〇〇頃松山基地に着陸した。

佐多岬上空からの粉雪も松山基地上空にさしかかる頃はあがって、冬の柔かい陽光が雲の切れ間から洩れていた。松山基地では紫電が離着陸訓練中で、列線にも二、三機並んでいた。

もともと戦闘七〇一飛行隊（紫電戦闘機隊、隊長白根少佐）は、横空所属（十九年七月横空で編成、使用機紫電一一型、初代隊長新郷少佐）であったが、空地分離により特設飛行隊として宮崎基地でT攻撃部隊に編入され、台湾沖航空戦では征空隊として出撃（松葉小尉がF6F四機撃墜）、その後比島マルコット基地に進出した。

主力出撃後の宮崎基地ではマルコット基地進出機の整備と搭乗員の訓練に明けくれ、十二月二十一日最後の出撃機を出したあとは、搭乗員では坂井三郎少尉、それに要務士の私と整備科の残留隊だけとなった。

十二月の終り近いある日の昼食時私は、三四一空残留隊先任将校川崎少佐から、「戦闘七〇一は比島より引き揚げることになったので、明朝〇八〇〇の君の比島行きは中止だ（三四一空戦闘四〇二飛行隊最後の進出予定のこの日、私も一緒に比島へ行くことになっていた）。戦闘七〇一は新しく松山基地で編成されることになったから、君は明日松山へゆけ」との命令をうけ、新編七〇一飛行隊の一員となるべくここ松山基地に着任したのだった。

新編七〇一には、西元上飛曹以下搭乗員が十三、四名先着していたが隊長、分隊長は未着で、誰が隊長、分隊長になってくるのかも不明であった。翌朝から坂井少尉の指揮で、紫電についての座学と離着陸訓練が始められた。

十二月三十一日私は、宮崎基地に残留している七〇一整備科分隊の松山基地への移動についての打合わせのため宮崎へ行った。飛行科事務室残留物件の松山移送を下間少尉と佐藤整曹長に依頼し、整備科分隊と打合わせの上早々に松山へとってかえした。

その後間もなく七〇一飛行隊には、搭乗員では十三期予備学生出身の保井、岸本、佐々木の各少尉が着任し、ついで宮崎基地三四一空で顔見知りの火傷後の快服なった渡部幸博中尉が分隊士として、また額に大きな傷跡を残した山田良市大尉が先任分隊長として、長髪美男子の松崎国男大尉が後任分隊長として着任された。

隊長鷲渕孝大尉は一月八日午前着任された。目がくりくりと輝き、戦歴は知らなかったが、指示、命令もテキパキとして、洵に感じのいい隊長、というのが最初の印象であった。

整備科分隊長は、鹿屋司令部に要務連絡に行った折零式練習戦闘機の後席に一緒に乗った辻野喝禅大尉、分隊士は十時、下間各少尉、佐藤、綾、佐々の各整曹長、整備科先任下士官等元七〇一残留隊は皆新七〇一に着任され、大いに気を強くしたのだった。要務士では、森少尉、内藤少尉、田中候補生が着任し、それぞれ任務を分担し、私は飛行科事務室と飛行隊指揮所の仕事を担当した。

一月中旬には、待ちに待った元七〇一の生存搭乗員が比島から苦難の末引揚げてきた。ダグラス機から降り立った姿は、戦地の苦闘をそのまま物語る飛行服姿であった。

大村哲哉中尉、比島から空輸のため二回も宮崎基地に帰られた歴戦の松葉秋夫少尉、髭をはやした石川菊一上飛曹、戦闘七〇一飛行隊歌の作詞編曲者で火傷を負った松田輝夫上飛曹、塩野三平上飛曹、小八重幸太郎上飛曹、石川広　一飛曹、枝橋由明一飛曹、村元幸雄飛長、栄建造飛長の以上十名。

また、三四一空戦闘四〇一で功績のあった山田武夫上飛曹も七〇一の隊員となった。

一月中旬、先任搭乗員の松本安夫上飛曹が着任し、これで戦闘七〇一飛行隊の全搭乗員が揃ったわけである。後発のため余儀なくされていた訓練のおくれも、実戦参加者の加入によりしだいにとりもどし、それに鴛渕隊長は先任飛行隊長で空中総指揮官であるという誇りとも相まって、七〇一飛行隊の志気は大いにあがった。機種も紫電から逐次紫電改へと改善され、以前の七〇一飛行隊に勝る第三四三海軍航空隊戦闘七〇一飛行隊が編成されたのである。

四〇一飛行隊の歩み

土山牧群（四〇一）

戦闘四〇一（極天隊）は昭和十八年十一月十五日松山基地にて、戦闘四〇二とともに三四一空（獅子）の一隊として、司令小笠原中佐のもとに開設された。

同月二十三日、徳島空より第三十二期飛練戦闘機専修の課程を了えた甲飛十期生が大挙して入隊し、部隊としての態勢を整えた。十二月五日笠ノ原基地に、十九年一月十日館山基地にと移動し、十八日紫電三機が配され、本邦最初の紫電による戦闘機隊が誕生した。爾後、逐次機材の補給を受け成長したのである。

十九年六月十五日、六二航戦の一隊として硫黄島にて参戦、七月十日笠ノ原基地に部隊司令部を移し、戦闘四〇二を錬成隊として残し高雄に進出。台湾沖航空戦を始めB－29の邀撃等に参加、十月十九日比島クラーク地区マルコット基地に司令部とともに進出。比島沖航空戦では、特攻を含む各種作戦には甲飛十期生を主に、特乙一期らが縦となって参加した。

戦闘四〇一飛行隊長　白根斐夫少佐（兵64）

戦闘四〇二飛行隊長　藤田恰与蔵少佐（兵66）

この他、浅川、岩下、光本大尉らが行動をともにし、二十年一月七日、北ルソンに移動、司令部を残し、搭乗員と機材はツゲガラオから台湾を経て逐次松山基地に集合した。

二十年二月十五日、戦闘四〇一、四〇二飛行隊は三四三空（剣）に統合されたが、四〇二飛行隊は三月一日附六〇一空に藤田少佐らとともに転出し、木更津、筑波と移動、筑波空紫電隊として首都防衛を分担したが、姫路基地に進出後、福知山にて筑波空福知山分遣隊として終戦を迎えた。一方、戦闘四〇一飛行隊は極天隊と命名され、全国各地から補充をうけつつ錬成隊としての訓練を開始した。三月一日徳島基地に移動を開始し、三月末日までに移動を完了している。

この間

飛行隊長　浅川正明大尉（兵69）

分隊長　斉藤義夫大尉（兵71）　分隊士　普川秀夫、岡元高志少尉（特）

基幹員　中村佳雄上飛曹（ラバウルにて有名を馳せた二〇四空の勇士）の他、前述比島より引き揚げた甲飛十期小野、森、糸井、横堀、大塚、古積、渡辺、桜井上飛曹ら。

隊長浅川大尉（三三二空に）、斉藤分隊長らの転出に伴い、豊田光雄（特）は分隊長として三月末着任、八月十三日大村発にて副長相生中佐が松山基地に向われる途中終戦を迎えたので、この間、隊長欠員のまま分遣隊長として指揮しておられた。

四月初めの隊員は（前述者を除く）

兵72　向井、中西中尉（五月大尉となる）　兵73　狭間、加藤、伊藤、藤田、宮本、新井田、外海、佐々木、浅沼、上垣、鳥井、五十嵐中尉

予13　秋山、伊藤、伊勢、植松、大塚、岸本、沢田、在園寺、新堀、高牟礼、塙、馬渕、水田、山本、村田、山田中尉

予14　森少尉

上飛曹　稲垣、土山、林、井上（進）、岡井、唐沢、惣門、井上（久）、中野、寺崎、谷口、田島

一飛曹　岸本、内田、中野、長峯、福長、村上、新谷、菊池、中根

二飛曹以下　笹本、大東、中川、山口、白根、古川、井上（修）

保有機　紫電11型　五
零戦52型　五
複座練戦　二
93式陸中練　一
90機上練　一

機練、中練は四月以降は操訓には使用されず、専ら連絡要務飛行にのみ使用していた。

三月四日の訓練は、基幹要員を中心に、戦闘機出身者は紫電により操訓、錬成員は技倆に応じてそれぞれの機種により離着陸をはじめ、各種操訓をしていた。三月十九日の松山基地の戦闘には地上員として活躍した。

三月二十四日　吉田政雄飛長殉職　三月末日　徳島基地に移動完了　四月三日　菊池暹二飛曹殉職　二十五日　村田義雄少尉殉職　二十七日　白浜勝二飛曹殉職

この間、鳴尾工場より数機の紫電11型が小野、古積上飛曹他によって空輸された。

五月　十日　松山基地に移動予定のところ、松山基地被襲のため数日延期

五月　十八日　山口米夫飛曹長殉職。脇大尉（整備長）他技官を九〇機錬に便乗させ、鳴尾工場への要務飛行にて離陸直後墜落、全員死亡。

六月　初旬　島川正明上飛曹着任。このころから一部のものは四対四、四対八の空戦を時折行なうようになる。紫電改数機本隊より払下げられる。

八日　中根明雄一飛曹殉職。中西大尉、横堀、古積、小野上飛曹ら本隊に転出。

七月二十六日　松山市夜半焼夷弾により被襲

八月　六日　B－29広島に向う途中、松山上空を通過、被爆の瞬時より望見

八月　十三日　この日B－29他による最後の被襲

八月　十五日　向井大尉、岡元少尉他大半の隊員本隊に補充のため陸路出発

八月　十五日　終戦

十八日　源田司令来隊

二十日　飛行作業修め。軍医長より訓話

二十一日　一時休暇のため全員退隊　八月末ごろラジオにより原隊復帰が命ぜられる。

九月一日　十一月一日予定進級者繰上げ進級。

九月二日以降　正式復員　以上が戦闘四〇一飛行隊の概略である。

続く

土空から八十年後

海原会参与　行方　滋子

一　はじめに

令和二年（二〇二〇）十一月十五日、土浦海軍航空隊がこの地に開設されてから、ちょうど八十年を迎えました。

現在、私は陸上自衛隊武器学校で勤務しています。そして、「予科練揺籃の地」といわれたこの地に勤務できることの幸せと誇りを毎日噛みしめています。

陸上自衛隊武器学校が、旧土浦海軍航空隊跡地に移駐してから六十八年の歳月が流れました。その間には、昭和四十一年（一九六六）に「予科練の碑」が建立され、昭和四十三年（一九六八）には「雄翔館」が開館しました。土浦駐屯地に勤務する隊員と予科練生は、土地の縁で繋がり、今も共に歩んでいます。

そこで、「土浦駐屯地の歴史」とそこに勤務している隊員の今をご紹介したいと思います。

二　土浦駐屯地の歩み

大正十年（一九二一）海軍水上機の訓練を行う海軍臨時航空術講習部水上班が開設、翌年の大正十一年（一九二二）には、霞ヶ浦海軍航空隊水上班と改称され霞ヶ浦の湖畔に拠点を構えました。

その後、昭和五年（一九三〇）横須賀海軍航空隊において開始された予科練教育は、隣接する海軍航空廠からの騒音問題や予科練生の増員による施設拡張の余地が少ないことから、昭和十四年（一九三九）三月三十一日に阿見村（現阿見町）にある霞ヶ浦海軍航空隊水上班の敷地を拡張し、そこへ移転することとなりました。そして、霞ヶ浦海軍航空隊飛行予科練習部は、昭和十五年（一九四〇）十一月十五日に霞ヶ浦海軍航空隊から独立し、「土浦海軍航空隊」が誕生いたしました。

そこから終戦まで予科練及び予備学生の教育（基礎教育）が続けられた場所です。

昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦後は、同年九月二十日に約二百名の米国第八軍の部隊が進駐し、昭和二十一年（一

九四六）二月一日まで駐留していました。

その後、東京都世田谷区深沢にあった日本体育専門学校が昭和二十年五月二十四日の空襲で校舎施設を焼失したことから、昭和二十一年四月二十日、土浦海軍航空隊跡に移転して来ました。

しかし、各種の学生スポーツ大会や対抗競技会の多くが東京周辺で開催される上、交通事情が悪いことから、昭和二十六年（一九五一）三月、再び世田谷区深沢へ移転することとなりました。

阿見町での教育は、五年間でした。

陸上自衛隊武器学校の前身は、昭和二十六年十二月八日、総隊総監部武器課派遣勤務として谷本一正、鈴木、水野、今泉各二正、鶴田、森各士長の六名により総隊武器学校（開校までは仮称）の開設準備が立川駐屯地（現東立川駐屯地）で開始されました。

昭和二十七年（一九五二）一月七日には、幹部二十七名・士補等（陸曹等）五名計三十二名の人員で、教育準備が開始され、同年一月二十一日に警察予備隊総隊武器学校の開校式をむかえました。実に、準備開始から約一、五ケ月で開校の運びとなったのです。

しかし、立川駐屯地では敷地拡張の余地がないことや隊員の増加にともない学生教育に大きな支障が出ることから、旧海軍航空隊が適地であるとして、急遽土浦駐屯地を新設することが決定されました。

当時としては異例の速さで調査・設計が行われ、昭和二十七年六月に着工、九月十五日に概成させ、十三コースの教育実施に支障がないまでに補修・新設されました。そして、同年九月に土浦駐屯地に保安隊武器学校が移設されたのでした。

その後、昭和二十九年、保安隊から自衛隊に改編し、陸上自衛隊武器学校に名称が変更され、現在に至っています。

旧土浦海軍航空隊の半分の敷地を利用し、外周が二．七キロ、敷地は四十一万平方メートルで東京ドームの約九個分です。

三　駐屯地の概要

土浦駐屯地には、武器学校、東部方面通信群第一〇五基地システム通信大隊第三二〇基地通信中隊土浦派遣隊、第一二七地区警務隊土浦連絡班、東部情報保全隊土浦派遣隊が所在し、約五百名の隊員が勤務しています。

武器学校は、兵站職域における指揮官・幕僚等を養成する教育、陸上自衛隊の保有する武器科装備品の整備教育、不発弾処理等の弾薬教育を実施しています。

また、入校学生は、予科練関連施設の研修及び雄翔園の清掃等を通じ、先人の使命感を学ぶとともに自らの使命感を涵養しています。

平成三十年（二〇一八）度から兵站の実効性を向上させることを目的として兵站センターが運営され、兵站分野における陸上自衛隊初の職種横断的な組織として、兵站に係る運用研究・共通教育の統制・部隊訓練支援業務を行っています。

四　駐屯地の行事

令和二年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止及び皆様の安全を第一と考え、各種イベント等は中止となりましたが、例年駐屯地で開催されている主な行事等について、ご紹介いたします。

まず、春は満開の桜のもと、駐屯地観桜会（駐屯地一般開放）が開催され、メイン道路に並ぶ桜が皆様を御待ちしています。秋には、駐屯地開設記念行事を開催し、記念式典、武器科装備品展示、戦車体験搭乗等が行われ、多くの来場者の方々から大好評を得ています。また、隊員有志により、駐屯地の近傍に所在する海軍航空殉職者慰霊塔の清掃が行われ、土浦駐屯地に勤務していることの特別な意味と先人たちの想いを継承することの重要性を深く認識しています。

五　現存する予科練の歴史

土浦駐屯地には、今なお予科練の歴史を感じることができる場所があります。

昭和十七年（一九四二）に、昭和天皇が霞ヶ浦海軍航空隊および土浦海軍航空隊に行幸され、

予科練生の実施する海軍体操等を視察されたことを記念して建立された「行幸記念」の碑、昭年の十八年（一九四三）六月に皇太子殿下（平成の天皇）が行啓されたことを記念して植樹された「五葉松」などがあります。また、昭和十五年、土浦海軍航空隊本部として建設された本館は、耐震強度等の不足により平成二十三年（二〇一一）に現在の本館に建て替えられました。

その際、学校長室には、第十九練習連合航空隊の初代司令官であった海軍少将久邇宮朝融王の執務室で使用されていた芸術的な木彫りの鳳凰をかたどった飾り棚（棚内の両側には、陸海軍の神様として祀られていた鹿島・香取両神宮の油絵が描写）が移設されました。また棚内の中央には御真影が飾られていたと言われています。

その他にも、昭和十五年に医療施設として建設された旧医務科跡や山本五十六元帥によって揮毫された「常在戦場」の碑等により、当時をしのぶことができます。

学校長室の飾り棚

六　おわりに

今回は、土空八十年の節目にあたり、「予科練揺籃の地」といわれた場所が、現在では「武器技術、兵站の聖地」となり、昔と変わらず、多くの隊員がこの地で学び、巣立って全国の駐屯地で活躍していることをご紹介させていただきました。

予科練から武器学校へ、時代の流れは大きく変わりましたが、防人としての「使命感・責任感」は今も変わることはありません。

慰霊祭等で、土浦駐屯地を訪れた際に、ぜひ感じてみてください。

【参考文献】
・武器学校史
・修親　二〇一九、八月号
阿見と予科練

「忘れてはならない時代の記憶を伝え続ける一人の医師の記録」

海原会理事長　菅野寛也氏の、三十年に及ぶ戦没者慰霊の旅を記録した単行本「たった一人の慰霊祭」が、発刊されました。

昭和二十年六月、終戦間近の静岡市でB29から投下された爆弾により、約二千名の静岡市民が犠牲になりました。そして、その時B29が空中衝突し、亡くなったアメリカ空軍の軍人が二十三名いました。

戦後地元の住職伊藤福松氏と共に「仏になれば敵も味方もない」と弔い続けてきた菅野氏が、平成三年にたった一人で渡米し、ハワイでの慰霊をするために訪れた日蓮宗ハワイ別院、そこで菅野氏にかけられた「君はここに何をしにきてるのかね？」それは、たまたま予科練戦没者の慰霊の為に渡米していた元海原会会長故前田武氏（甲飛三期生）の一言でした。

帰国後、菅野氏は海原会に入会、理事として今日まで予科練戦没者の慰霊を続けています。

それが縁で、予科練戦没者慰霊祭にも、数次にわたり退役米海軍の関係者に参列していただいております。

このたび、終戦七十五年を迎えたのを契機に、ハワイ訪問の度に静岡市医師会誌に投稿したり、自費出版をした内容を再編集し、単行本『たった一人の慰霊祭』として産経リーブルから発刊されました。

会員の皆様には、是非お近くの書店またはアマゾンブックにてお買い求めいただき、ご一読いただければとご案内申し上げます。

なお、単価千八百円で販売しております。

（事務局）

私の昭和史 ④

海原会会員
平野　八代子

型通りの初対面の挨拶の後、「お前はあちらに行ってろ」と父にいわれて、祖母、叔母、妹と別の部屋で聞き耳を立てていました。

彼は「自分の両親は早くに亡くなり、石川県の出身ですが墓を母の実家の大分の宇佐に移しましたので大分の方に帰ってきて、自分には墓以外何もありません。子供時代を朝鮮で過ごしましたが、帰国後海軍に入り特攻を志願しました。出撃前に終戦になり今は自分一人の暮らしがやっとです。」と私も初耳の話をし始めました。

さらに続けて「これから頑張って生活の基盤を作ります。その時にまたお会いしてください。今日は手ぶらでお邪魔しました。」と話ました。

父は「金の無いのはお互い様だよ。今日はゆっくりして話でも聞かせてくれ。海軍のな。」「母さん座っとらんで、何か食べ物を」の声、

「食事は済ませてきましたんで。」と彼が言えば「若い人だ。入る入る。」と父の声。

待ってましたとばかりに叔母がサッと襖を開けました。そこにはすでに膳ができあがっていました。

叔母は「叔父さんの手回しよ、後でお礼を言いなさいよ。叔父さんがね、『兄貴が一目で気に入るタイプだよ。好青年だよ。親なしだしな。鯛だよ。鯛が釣れたんだよ。』って言ってたよ。」とまるで自分の事のようにはしゃぎ、その日は友達も来てにぎやかな夜となりました。

周りのまるで婚約成立のような盛り上がりに叔父は「いい時代になった。善は急げだ。」と言えば、祖母も敏江叔母さんの事を思い出したのか、エプロンで涙を拭いていました。

十九才での結婚でした。人並みの苦労や喜び悲しみの結婚生活のお話はまた次の機会にとっておく事にして、現在へと時を進めたいと思います。

第十二章　終章
・・・そして未来へ

私は、今年で（平成二十七年）八十四歳になりました。数年前から、眠りに着く時いつも五分くらい枕元でラジオを聴きながら寝る習性がついていました。二年位前の事ですが、その時は不思議なことに朝ラジオのスイッチに手が伸びていました。六時頃だったと思います。ぼんやりと『岩永』、『特攻』、『宇佐』というアナウンサーの声が流れていました。

私の中に電流のようなものが走りました。思わず飛び起きました。地元のラジオ局が放送した戦争の想い出を語るといった視聴者参加型の番組だったと思います。放送の内容は、本人が小学校の頃の友達の兄さんの想い出話だったと思います。

最初に聞こえてきたのは、『手紙』、『学校』、『授業中』という単語で、それに続いて「今日は岩永君のお兄さんが特攻で飛び立つ前に皆さんにお別れに飛行機で来ますので、今から全員で運動場に出てお見送りしま

す。皆さん全員集合してください。」僕たちは急いで外に出て空を見上げていた。

ポッンと黒いものが見えて、飛行機が飛んできた。爆音が聞こえて白いマフラーをした岩永君の兄さんの飛行機は学校の上を三回ゆっくりと旋回し敬礼をしていた。

皆で手を振ってサヨーナラと見送った。皆が教室に帰った運動場に岩永君一人だけがいつまでも空を見上げて立っていた。

飛行機が戻って来て町や海の上を旋回した。・・・そして、白木の箱の中に遺骨はなく、白い布に包まれた『お前らのためなら何でもないことだ。』と書かれた手帳が入っていたと後で岩永君に聞いた。で放送は終わった。

十七歳の時に初めて聞いた岩永という名前。たった一度、あの帰国直後に涙の中で聞いた名前を忘れもせずに思い出していた自分に驚いたり、岩永さんの事を知りたいと思っていたがかなえられず、それが半世紀以上の時を経て、今頃知ることになった驚き。

朝のまどろみの中で、ラジオのスイッチへと伸びた手の不思議。

英霊の魂が戦後七十年近くなった今、帰ってきてくれたのではないのかと思いました。問い合わせましたが、宇佐には記念館も当時を偲ぶものは無いとの事でした。大分県の県政の見え隠れの貧しさが寂しく恥ずかしくもありました。

先日の事ですが、テレビで渡辺謙さん主演のドラマ「硫黄島からの手紙」だったかの番組を見ていた時のことになりますが、レイテ島の玉砕はいろいろな情報で知っていましたがペリリュー島でも玉砕さえも許されない過酷な戦いがあったことを初めて知りました。

そして、なんと満州にいた関東軍が転戦しての南方での戦いであったことを知りました。あの時の一夜にして広東軍がいなくなっていた謎がやっとわかった瞬間でした。

やすやすと侵入できたロシア軍、子供のような若い兵隊さん、なにもかもが今頃になって、この年になって知ることができたのです。

私には、彼の形見の息子が二人います。

長男は自衛官として定年を無事に迎え、御縁をいただいた今の会社でお世話になっています。父親が若かりし頃の意思を継いで日本国へのご奉公これを縁と言わずになんといえばいいでしょうか。

今の仕事に励みながら、予科練海原会の少しでもお力になればとお世話させていただいていると聞いております。

世界のどこに日本よりいい国があると思いますか。災害があると何千人何万人であっても、最後の一人までもさがしてくれる。有難いですね。

こんな、日本を皆で心を合わせて守らなければいけません。桜の花が血の匂いになるような国にしてはなりません。

日本の国を守るために、若い命を捧げてくださった英霊の方々への礼節を忘れてはなりません。

次男は、小さい頃から「兄ちゃんは、大学に行ってスーツで働け、僕はジャンパーで一流企業で働く」と冗談のように言っていましたが、その言葉のとおり工業高校を卒業し、大手の企業に技術系社員として就職し、高卒ながら課長職をいただき定年を迎えました。

私は七人の曾孫を抱くことができました。何とか平均寿命まで頑張りたいのですが平均年齢がどんどん先に行ってしまうので、大変です。

耳が少し聞きづらくなってきましたが、セミの鳴き声が、より静かでいいと思える程度です。戦争に翻弄されての人生を生き抜いてきたのに、この年になってなんだか生きづらい世の中になってまいりましたのは、多少辛い思いもありますが、今こうして次男の傍で、豊かな人情と、美しい自然に囲まれて、主人の残してくれた物で間に合う生活を送ることができ、さらには二人の息子や孫たちがきちんとお国への税金を納めさせて頂いているということは、私の人生も幸福のうちに終わりを迎えるこ

とができたんだと自画自賛いたしております。

私は、肉体は土になっても、魂は永遠に生き続けていると信じています。ただただ自分の命を引き延ばして生き続けることは望みません。神に願うとしたら、自分が自分であるうちにお迎えに来てくださいということです。

終戦七十年を迎える今日、これまで誰にもその詳細を話してこなかった満州からの引揚の様子を、ここに書き残すことにより自分の昭和史に一区切りをつけるとともに、もう二度とこんな悲惨な戦争を繰り返すことがないように心から祈りたいと思っています。

若かりし頃の筆者

最後になりましたが、英霊の魂の安らぎを願うことは誰にも気遣うことではないし、日本国民であるからこその行動だと私は思っています。靖国神社で会おうと約束して散って逝った若者達の思いを、私達は決して忘れてはならないと強く思っています。

毎年土浦で開催されている慰霊祭に、一度参加したいと思っておりましたが、ついに夢かなわずこの年を迎えてしまいました。慰霊祭当日には遠くの地から英霊の皆さんに手を合わせておりますのでご容赦いただきたいと思います。

先の大戦でこの美しく素晴らしい国「日本」を守るために若くして亡くなられた予科練戦没者の皆さんのご冥福を心からお祈りして、筆をおくことにします。

平成二十七年　春

合　掌

豫科練の戦争

久山　忍　著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ①

甲飛十四期
戸張礼記

私は昭和三年生まれ。茨城県出身。昭和十九年六月第十四期海軍甲種飛行予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊。

しかし戦争末期の物資不足から練習機に乗る事が出来ず、昭和二十年三月になるとついに予科練教育が中止となり、その後同年三月三沢第二海軍航空隊（青森県）に転属となり、敵機から味方の飛行機を隠す掩体壕造りに従事。七月大湊海兵団特攻陸戦隊に配属される。

同隊の任務は下北半島の海岸沿いに「タコ壺」と呼ばれる穴を掘り、爆雷を抱えて潜み敵の戦車もろとも自爆する特攻作戦であった。

私は特攻隊員として死を覚悟

するが、敵は上陸することなく昭和二十年八月十五日海軍二等飛行兵曹で終戦。

甲飛十四期は二千名以上が予科練生として入隊したが、予科練を卒業したのは前期のみで、卒業した多くが回天や震洋等の特攻兵器要員となる。

予科練時代の戸張礼記氏

もし卒業していれば特攻隊員として出撃して戦死しただろう。

現在は茨城県にある「予科練平和記念館」の歴史調査委員として活躍中である。

あの日、あの時のことを話したい。その時、私は何をしていたのだろうか。記憶は薄らぐ一方だが、忘れられない月日がある。

月日は百代の過客にして行きかう年もまた旅人なり

奥の細道のこの言葉を私は事あるごとに思い浮かべる。

時代の流れに浮きつ沈みつしながら流されてきた私の生涯。それはまさに運命という河に浮かぶ船の上で過ごしてきた人生であった。

大本営の発表しか知らされず、ひたすら闘魂を叩きこまれた予科練時代の日々。あの日、あの時の戦局、時局はどんな状況であったのだろうか。そして若かった自分はどんな青春を送ったのであろうか。

それを自分なりにまとめてみたい。自分自身の気持ちの整理もかねて。そんな思いに駆られて眠れぬ夜にこの原稿を書くことにする。

予科練の倉町秋次教官は、著書『予科練外史』（六巻）の序文で次のように書いている。

予科練の少年たちは、特別な少年ではなかった。普通の少年で、強いて違うところと言えば、大空を愛し、格別に飛行機が好きであったというくらいであろうか。彼らはあまりに純真であり、それゆえにか血と涙が多すぎる。そんな少年が多かった。そのような少年たちが国難に対して献身した。そして八割が戦死した。

思えば私もそんな少年の一人であった。健康で優秀な十代から二十代の若者が八割も死んだというのはすごいことである。しかし今、国難に殉じた予科練の若者のことを知る人は少ない。

ある式場で司会者が「予科練」を「よかねり」と読み、予科練の関係者が憮然としたという話を聞いたことがある。

予科練は「よかれん」と読む。戦時中、海軍のパイロットを養成するための教育機関であった。名称の変遷はあるが、一般的な正式名称は「海軍飛行予科練習生」である。

現代の人が「予科練」を知らないのは当然である。戦後の教育環境が「戦争」を教えることを許さなかったからである。教えられていないものを知っているはずがない。

現代の人が予科練のことを知らないのは「無知」ではなく「不知」なのである。知らない若者たちのことを嘆くのではなく、教えなかった大人たちのことを責めなければならない。

私も予科練生であった。特攻基地から復員して戦後は学校教員となり四十年近く勤めた。予科練の経験者でありながら、私は学校で戦争の話を一切しなかった。

戦後、数十年が経つと戦争体験がない人が社会の中心となる。教育する側に立つ親や先生が戦争に関する経験も知識も無い。しかも、戦争の問題は入試に出ないため勉強しなくても高校や大学に合格できる。そういった社会構造になっているため益々無関心が加速する。

その結果、現代の若者たちのなかには、日本が嘗てアメリカと戦争をしたことも知らない大学生がいるという。さすがにまさかとは思う。しかし今の人が「予科練」を知らないのは事実であろう。

今、アイドルを追いかけている若者たちと同じ年代の若者たちが、七十年前、一度きりの青春を空や海に散らした。

日本を護るために死んだ者にとって忘れられることほど辛いことはないだろう。「知られざる予科練」となってしまった先輩たちの無念さを思うとやりきれない。

それにしても八十六歳を迎えるまで生かされておきながら、これまで私は何をしてきたのだろうか。戦死した先輩たちが忘れ去られた現状を見るにつけ、慚愧に堪えない。戦争教育を怠ってきたことに罪を感じ「誠に申し訳ありません」と頭をさげるしかないというのが正直な気持ちである。

私たち生き残り兵士は、死んだ先輩たちの真情を語りつがねばならない。それが「後を頼むぞ」と声をかけられ、戦後まで生かされた予科練の後輩である私たちの責任なのである。この責任を果たさなければ、あの世へ逝ったときに先輩にあわせる顔がない。

だからこそ語らずには死ねないのである。

開戦と父の死

昭和三年（一九二八年）十一月生まれの私は、君原小学校を昭和十五年に卒業し、昭和十六年四月一日に茨城県立土浦中学（現、土浦第一高等学校）に入学した。

私は田舎の山猿であった。町の子たちの輪にも入れない。おずおずとしたおとなしい生徒だった。

家と学校は遠く、自転車で片道一時間十五分かかった。私は雨の日も風の日も休まなかった。通学がきついとも思わなかった。ただひたすら学校に通った。

一年が過ぎると、一年間無欠席で表彰された。私は「欠席することは悪い」と言われていたから休まなかっただけである。表彰されようなどとは思っていなかっただけに嬉しかった。

ただそれだけのことで自信がついた。それからは学校生活にも慣れ、町の暮らしも板についてきた。そうしたときに戦争が始まった。

昭和十六年十二月八日、月曜日。その時私は学校の自転車置き場に愛車を押し込み、校庭を横切って教室にむかう途中だった。突然、校内放送のスピーカーがガーガー鳴り出した。甲高い男の声が何かを言っている。何事かと耳をすますと、

「西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」

という言葉が聞き取れた。

（うっ、戦争だ。始まった）

ゾクッと背筋を悪寒が走った。そのことを今でもよく覚えている。それは命の危険を感じておびえた小動物のような本能的な感覚だった。

そして私は戦争という巨大津波に巻き込まれ、流されていくのである。

さらに運命が私を襲う。父が急死したのである。

父は小学校の校長を務めており、祖父母は小売り商店を営んでいた。そして我が家は二十俵くらいの年貢米があがってくる小地主であった。当時としては裕福な暮らしをしていた。

夏休みには家族旅行や海水浴に行った。銚子の海水浴場に一週間も泊まったこともある。饅頭やお菓子を自宅の店から勝手に持ち出したり、『少年倶楽部』の付録をズラリと並べて雑誌を読みふけったり、カメラを親にねだって買ってもらったりした。私は幸福な家庭に育っていた。

開戦の日からわずか一カ月半のこと。小学校の校長だった父は公用で県庁へ出張するため、早朝、土浦駅にむかった。そして駅の近くで倒れた。狭心症であった。

私が知らせを受けたのは一年丁組の教室にいたときである。国語の授業中であった。

うすら寒い教室の前の引き戸が音もなく開き、黒い詰め襟の学生服を着た給仕がスッと入って来た。そして何やら小声で先生に話をするとすぐに帰っていった。

（何事ならん）

と思っていた私のところにつかつかと先生が近寄ってきて、

「お父さんが危篤だそうだ。迎えの人が来ているからすぐに帰りなさい」

と言った。私は迎えに来ていた自転車の後ろに乗せてもらった。

（危篤というんだからまだ死ん

でいないんだろうな。早く、早く）

と祈るような気持だった。そのとき誰が迎えに来てくれたのか覚えていない。その人は駅前の病院まで一生懸命ペダルを踏んでくれた。しかし、間に合わなかった。

病院に着くと父の顔には白い布がかけてあった。寒々しい病室の畳の上に横たわり体には薄い布団がかけられていた。ぐっすりと眠っているようだった。

信じられなかった。「おっ来たか」と今にも起きてくるような感じがした。私はじっと身を固くして父を見つめていた。他に誰もいなかった。

しばらくして母が青ざめた顔で駆け付けた。母も死に目に合わなかったのだ。

「お父さん、お父さん」

母は遺体にすがって泣き伏した。母の号泣する声はいつまでも私の耳に残った。

命日は昭和十七年一月二十一日。享年五十一歳。

後で聞いた話によると、父は倒れてからすぐに意識がもどった。そして母が小康状態となった父の看病をしていたところ、父から用事を頼まれた。

父は学校のことが心配で何か仕事上の連絡を母に頼んだらしい。そして母が用事を済ますために病室を離れている間に発作を起こして父は亡くなった。

今なら助かったろうに。残念でならない。

村人たちの好意で学校葬が盛大に行われた。祭壇の前に家族一同が並んで座った。

私は父が大好きだった。本当に良い父だった。

つるべ落としの秋の陽は早く、学校の帰りは遅かった。私は、迫りくる夕闇に追われるように坂道を自転車で一気に下って帰る。

目をむければ田んぼの向こうにある墓地の巨木の上に、赤くて丸い月が大きく怪しく輝いている。

（狸のお化けのようだ）

と不気味だった。よく見ると明神様の前の長い坂道を黒い人影が下りてくる。その人影は提灯をぶら下げてトコトコ歩いてくる人がいる。それが父だった。父はそうやってよく私を迎えにきてくれた。

私が父の前で自転車を止める。父のポケットには温かい焼き芋が入っていた。真ん丸な月を背に、父が自転車を押し、私は焼き芋をかじりながら歩く、月明りの長い坂道をとぼとぼと家路を辿る親子。

その情景が今も懐かしい。思い出すたびに目が潤む。父は突然、旅立った。どんなに後ろ髪を引かれたことだろう。

父の遺体に取りすがって泣いた母は四十五歳で四人の子供をかかえてひとり残された。

これが母の苦労の始まりだった。そのとき兄は大学生、姉は師範学校生、私は中学生、弟は小学生だった。

母は、戦中の大混乱の世にあって、女手ひとつで子供たちを育ててくれた。その苦労は大変なものだった。

今はただ感謝するのみである。母よありがとう。

そして父よありがとう。

続く

雄翔館見学者所感

○令和二年月日不詳
住所　栃木県足利市
氏名　永倉　達久　七十才

私の叔父が（永倉利一）昭和七年第三期（乙）飛行予科練習生として入隊し、昭和十二年日中戦争東シナ海にて戦死。（二十二才）

子供の頃父より叔父の話を聞いていました。

一度この会館へ来たいと思っていましたが、今回初めて希望が叶いました。

また来たいと思います。

叔父に会った気がしました。

○令和二年月日不詳
住所　常陸太田市
氏名　石井　勲　八十才

私の兄も志願して少年通信兵としてルソン島にて二十歳で戦死をしましたが、国を守るという心がすごかったと思います。現在はどうかと思うだけです。

○令和二年六月二十七日
住所　東京都町田市
氏名　惠口寛子　二十八才
　個人的に宇垣特攻を中心とし海軍航空隊や特攻について調べている者です。
　昨年より松山、広島、呉、江田島、大分の宇佐や大分海軍航空隊跡などをめぐり、本日ようやくこちらに来ることができました。このコロナの諸々が落ち着いたら九州（串良、鹿屋など）まで出向くつもりでしたが、今日こちらに来られてよかったです。
　微力ではありますが海原会様に後日ご支援金をお振込みさせていただければと存じます。生まれて二十数年好き勝手に生きたいように生きてきました。
　でも私の人生が大空や海に夢を見た十数年を送り生涯を終えた彼らのお陰であることを忘れないように生きていきたいと思います。
　私がこの研究を始めて奇特な目で見られるかと思いきや、家族も友人も皆真剣に耳を傾けてくれます。今彼らの生涯を負うことにとても生きる意味を感じています。この雄翔館を作り維持してくださりありがとうございます。阿見の皆様、関係者の皆様お体に気を付けて。
　また来たいと思います。

○令和二年七月三日
住所　神奈川県横須賀市
氏名　長谷川　和弘　五十才
　今年度の慰霊祭に社会情勢下により参列がかなわず残念至極の極みでした。
　海自OBとしてこの海軍予科練制度を忘れず多くの大先輩に会いに参りました。今後とも施設維持・管理にご尽力賜るよう切にお願い申し上げます。
　海原会会員として微力ながらこれからもお手伝いいたします。

○令和二年七月十四日
住所　茨城県土浦市
氏名　黒澤　倖祈　十三才
　昔の人はいろんなことを思って戦争に参加していたんだなと思いました。戦争中の人々は家族と別れて特攻に行くのがつらかったんだと思いました。
　本当に戦争は起こしてはダメなんだなと言うのがこの遺書や遺品を見て強く感じられました。
　ぼくは大人になったら自衛隊に入りたいと思うので待っていて下さい。

○令和二年七月二十一日
住所　神奈川県横浜市
氏名　三浦　岳雄　四十八才
　本職も国を守る仕事であり使命と覚悟はありますが、今の日本にかってのように国難に対応できるか心配であるとともに先人のやり遂げたことのすごさ。（今の二〇代には戦争できる精神力がない）戦争の悲惨さ、再び戦争を起こさぬようにそれぞれの時代の政府、国民が努力しないといけないことを再度痛感しました。

○令和二年七月二十三日
住所　神奈川県相模原市
氏名　稲月　ちさと　三十二才
　私の祖父（一九二六年生まれ）は戦時中、この予科練で訓練を受けていたようで興味があり来ました。
　祖父は台湾で特攻の順番待ちをしていた時に終戦を迎えたようです。これだけ多くの若い命が失われたと思うと残念でなりません。
　終戦から七十年以上がたち、当時の体験者もほとんど少なくなってきているからこそこのような記念館は残していくべきです。
　祖父は二〇一五年に八十八才で亡くなってしまい、もっとたくさん話を聞けば良かったと後悔しています。

○令和二年八月一日
住所　北海道札幌市
氏名　古郡　望　四十才
　日本人として自衛官として戦争は他人事ではなく考えさせられることあり、来させていただきました。月日がたち最近の若い人たち（自分も含め）は昔どの様なことがあったのか、どうして今のような日本になったか等、分からない人々が多く感じます。
　このような施設を通じ、伝え、平和に過ごせるありがたさを伝

えていかなければと思いました。

○令和二年八月九日
住所　沖縄県宮古島市
氏名　長崎　吉朗　三十二才

二十才前後で散華された若者とは思えないほどの教養の高さ、国を思う気持ち、家族のことを思う気持ち、現代のわれわれとは格段の差があると思いました。私は沖縄県の者ですが沖縄を守るために多くの特攻兵がいたことを忘れてはいけないと思いました。

北方領土の方々と違い、沖縄は日本に復帰できただけでも相当な幸福です。

特攻隊の人々が自らの身を挺して日本、沖縄を守ったからこそ現代の我々は自由を謳歌することができると思いました。……私も娘がいますが、少し大きくなったら再度この記念館へ来ようと思います。

○令和二年八月十日
住所　千葉県茂原市
氏名　今関　啓子　六十五才

日本国のために亡くなられた方々を大切にされた展示を拝見し、たいへん胸がつまり感動いたしました。国を思う当時の若者たちの心を深く感じ、現在のコロナや国際情勢の難しさに対し、自分に何ができるか、できないまでも常に思い続けていきたいと思いました。

父が戦車隊で南方の島に行っており、実家に軍服が大切にしまわれていたことを思い出しました。大変ありがとうございました。

○令和二年八月十日
住所　茨城県古河市
氏名　関　ひかり　十四才

私は以前までさほど戦争に興味があったわけではありませんでした。学校の授業で少しまなんだくらいでした。しかし私はある日、子犬を抱いた少年兵の写真を見て、色々調べ始めるようになりました。

今日予科練記念館そして雄翔館を訪れ、若くして亡くなっていった方たちの想いに触れることができたと思います。たくさんの方々の遺影や遺書、遺品を見ると涙がこみ上げてきました。もし私がこの時代に生きる男性だったならきっと私は怖くて逃げてしまう。死ぬことが前提の攻撃なんて私にはできないと思います。

しかし彼らは違った。死ぬことが分かっていても勇敢に立ち向かう姿は本当に立派だと感じます。

しかし現代はバイクなどで爆走している人を「特攻隊」という現状があると知り、私は本当に滑稽で恥ずべきことだと思いました。

英霊の方々と一緒にするなという気持ちが沸々と。

○令和二年八月十日
住所　茨城県古河市
氏名　関　恵美　四十六才

今、娘が社会の授業で太平洋戦争について学んでいるところです。こちらの見学は二度目ですが、娘も幼すぎて覚えておらず、今日また伺いました。

今の若い子供たちの戦争についての認識は、私たちの世代が受けた感覚とは全く違うもので、それこそ「無駄死に」と軽く言っていることに深い悲しみを感じ、命をかけて国を家族を守りたかった彼らの姿をこの資料館で体験してほしいと思います。今の平和は彼らの苦しみ悲しみのもと成り立っているので、これからどんどん世界へ羽ばたく年代の子供たちに、戦争というものを忘れず世界平和に貢献していってほしいと思います。

少しでも彼らの慰霊になるのであれば。

○令和二年八月十二日
住所　茨城県石岡市
氏名　草野　淳　五十一才

幾度も足を運ばせていただいております。最初に訪れたときに生まれて間もなかった息子も小学校高学年になり、そろそろ人生どうあるべきか、という哲学的な話をしていく年齢になりました。

以前の勤務校の部活動の生徒を連れて予科練記念館を訪問した時、旧海軍のパイロットの方から講和をいただく機会に恵まれました。その方は話の最後私

たちに「頼んだぞ」と穏やかな口調で話されました。そしてかみしめるようにもう一度「頼んだぞ」と。

私たちが何を頼まれたのかそれを考え、その考えのもとに人生を歩んでいくということが、次の世代に向けて点を打っていくことに他ならないのだと思います。

息子が考え、生徒が考えて生きて行ってくれれば、後を信じて逝った皆様の想いをつなぐ役割を果たすことが出来たのかなと思います。そういう気持ちの五十代でありたいと思っております。

○令和二年八月十三日
住所　神奈川県座間市
氏名　大山　涼子　四十二才

現在コロナ禍の影響により世界的恐慌に見舞われています。今は対ウィルスになっておりますが、世界恐慌により「人対人」になってしまわないかと不安な日々が続きます。それによってまた戦争が起きてしまわないかと…子を持つ母として、また同じように若き命がたくさん奪われてしまわぬよう心から切に願います。

「一人の人間の死は悲劇だが、数百万の人間の死は統計上の数字でしかない」スターリン。

この言葉のように一人一人の手紙などを見てより感じました。

○令和二年八月十四日
住所　東京都府中市
氏名　上野　彰敏　二十一才

昭和歌謡が好きで「若鷲の歌」を聞く機会が多くあり今回参りました。

自分と同年代の人が亡くなっているということで生々しくかつ他人事とは思えません。再び時節の良くなった際に来たいと思います。

○令和二年八月十五日
住所　茨城県小美玉市
氏名　島田　みち子　六十四才

昭和天皇様の開戦の詔書を読みました。

その後この地予科練記念館を始めて参観させていただき、若人たちの御霊に手を合わせることしかできませんでした。この若人たちの基がありて今の日本の平和があること、決して忘れてはいけないこと。

我が孫達にも伝え続けていく所存です。日本国万歳。そしてありがとうございました。また靖国神社で手を合わせます。

○令和二年八月十四日
住所　市川市東菅野
氏名　長沼　武史　五十才

本日二度目の来館です。以前日々の仕事で迷いが出たら、ここの遺品を考え、自分の迷いが小さな事であることに気がつきました。

今日、改めて遺品の一つ一つを見て考え、自分と見つめ直せた気がします。ありがとう。

○令和二年八月十五日
住所　結城郡八千代市菅谷
氏名　湯本しのぶ　六十三才

若者の大切な命、それぞれ生きていたら、どんな人生があったでしょうか。親と子の絆に涙が自然にながれます。

私は戦争を知らないが「こんな事二度とあってはならない」と確信できました。戦争って何のため？だれのため？命より重いもの、大切なものって何ですか？と怒りにも思えます。

この写真の人達が自分の命に代えて日本を守ってくれたから、今日の安全な安心した日本が成り立っている事を忘れぬように、今の自分を大切にして社会ボランティアにつなげたいと思いました。

○令和二年八月十五日
住所　茨城県石岡市川又
氏名　島田　崇　四十五才

近年日本軍について見直されてきています。書店には彼らを讃える本が何冊も並ぶようになりましたね。そういう私も「日本軍は侵略軍」だとおもっていました。

その私も歴史や宗教を勉強するようになりました。勉強すればするほど日本の美しさを知ることになりました。日本兵と天皇の関係です。

過去の私は「独裁者と洗脳された人々」だと思っていたいま

したがそれは大きな間違いでした。
兵士は天皇を信頼していた。彼は「天皇が大切な人を必ず守ってくれる」とそう信じて散っていったと気がつきました。これが日本の美しさの正体なのでしょう。

○令和二年八月十六日
住所　銚子市柴崎町
氏名　長谷川みゆ子　六十才
二十三才の息子がおります。この子が兵にとられたら、私は生きてゆけません。決して、決して戦争が起こりませんように。亡くなられたたくさんの息子たちの御霊がどうか安らかでおられますよう。
息子たちを送り出された御母様方の御心がどうか、安らかでおられますように。幾度伺っても涙が止まりません。

○令和二年八月十八日
住所　水戸市渡里町
氏名　根本　典子　六十才
四回目来館です。何度訪ねても、頭上の若者たちに涙が出るおもいです。本日の平和は、あなた達の勇敢なる行いによりなりたっているのですものね。
ありがとう

○令和二年八月二十日
住所　小平市回田町
氏名　田代芳広　六十二才
亡父は、乙二十期、秋水への搭乗訓練を野辺山の地で行っているときに、終戦となりました。先日、はじめて野辺山の予科練の碑を訪れてきました。
そしてどうしても霞ケ浦に来なければと思い立ちました、往時の若者たちの、ひたむきな姿に無上のおもいが、こみ上げてきました。
彼らの御魂は、今なお、輝いて実在しているのだと、信じて止みません。　合掌

○令和二年八月二十日
住所　さいたま市西区
氏名　塩野　正一　五十四才
二〇才前後の若者が信念をもって散っていかれたことに改めて心が痛むおもいです。平和の中で何不自由なく生きられることがどんなにすばらしいことなのか痛感させられました。

○令和二年八月二十七日
氏名　鈴木　清美　六十六才
今自分なりに明治以降の近現代史を学んでいます。時代も異なり多くのお手紙を拝読しながら様々なことを思いました。
今の平和が、更に世界の平和につながるよう微力を尽くしていきます。

○令和二年八月二十八日
住所　利根町早尾
氏名　細井かつこ　六十七才
若くして国のために戦った事が、私にはわかりません。
そういう教育を受けた時代だったからでしょうか。

○令和二年八月二十九日
住所　土浦市国分町
氏名　小野関智恵子　五十六才
優秀な若い命が沢山散ってしまった。
たくさんの若者がこの国を護って下さった。その思いに只々頭が下がります。

○令和二年八月三十日
住所　武蔵村山市中藤
氏名　榊原　博之　四十九才
ただただ尊敬する。それぞれの時代も、大変と思うけど、彼らの覚悟は人間として立派です。日本国のために、ありがとうございました。

○令和二年九月九日
住所　阿見町本郷
氏名　深田ソウヤ　十二才
僕は夢があるけれど、この人たちはまた、夢も叶えられなくて、すごくかわいそうだと思います。
最後にお母さんやお父さん、兄ちゃんなどの顔をみれなくて泣いたと思います。
特攻では予科練平和記念館で見たVTRや文章、ゆうしょうかんでみた写真をみて、すごく戦争は絶対にしてはいけないということ、今この平和がぎせいの上にあるということを今回で改めて知らされてよかったです。
ありがとうございました。

死線を越えて①

海原会会員
甲飛十六期　松室　將幸

この記事は、松室將幸氏が平成二十六年に海上自衛隊小月航空基地において、航空学生の皆さんに講演された内容を、書き起こしたものです。

私はもうすぐ満八十五歳を迎えます。入れ歯のため、発音がしばしば不明瞭になり申し訳なく思っておりますが、しばらく辛抱して聞いて下さい。

日米協会岩国創設60周年
記念事業での松室氏

三年ほど前に故郷の広島市内で開催された旧制中学の同窓・同期生会に参加しました。広島市民の三分の一が爆死した原爆の被災を辛うじて免れ、生き残って馳せ参じた者は、十三名でした。

あれから三年が経ち、今年の同窓・同期生会に集まった者は私を含むたった二名でした。あと数名は生きてはいるものの健康上の理由で参加できないとのことでした。

昨年一年間に黄泉の国へと旅立った海軍航空隊時代の先輩、同期を含む数多くの人達の訃報に接し、私は今更ながら当時の事実を後世に伝える事の重大な意義をしみじみと感じております。

そして、私の命ある限り歴史の語り部となって多くの同年輩の若者が、母国日本の為に命を賭して、故郷に残してきた両親家族を思い浮かべながら唯々報国の念を、一途に懲憑として死地に赴き敵と刺し違え死んでいった事実を後世に伝えなければならないと強く感じております。

何一つ苦労のない日々を送っていた私が親元を離れて上阪、公立日本滑空学校に入校したのは、旧制中学三年生十四歳の時でした。

日本滑空学校は、陸軍の少年飛行兵制度及び海軍の予科飛行練習生制度を補完する目的で、急遽軍の要請で設立された機関ですが、恐らく海軍からの要請が強かったのでしょう、教員は全員海軍から配属された教員ばかりでした。

日本滑空学校での生活は、午前中約二時間の座学、その後は昼食を挟んでグライダーでの飛翔訓練という毎日でした。

体罰こそありませんでしたが、「総員起こし」から「食卓番整列・寝具につけ・消灯」まで号令総てが軍隊調で、それまで軍隊の経験のない私にとっては結構窮屈な思いをしたことを思い出します。それでも落伍者は無かったように思います。

週一回の休みといえば、握り飯の弁当を持っての引率外出、それでも当時はまだ遠足気分で一日が過ごせる、楽しいものでした。

徹底した訓練で軍国少年と化した我々は、教員を囲んでは勇ましい空中戦、渡洋爆撃、なにもかも胸の躍るような話に花を咲かせる休日でした。

滑空学校での訓練といえば、張策による高度十メートルからの滑空訓練から始めて、数か月後にはいよいよ自動車による曳航索巻き取りによる上昇訓練が開始されます。

震える手で操縦桿を握り、仰角を押さえながら三段階で高度七十メートルまで上昇し、次いで滑空角に押さえ込みフックを引き曳航索を落とす。

後は目測でS形を描くように高度を下げるのだが、七十メートルの高度からの下界は小さく、さながら動く箱庭を見ている気分でした。

ふと我に返ると自分が今とてつもなく高い所を飛んでいるのだと判り、思わず手足に力が入る。今もその時の命がけの感覚が脳裏に残っています。

数か月後には、プライマリーでの滑空訓練は終わり、セコン

ダリーによる飛翔訓練が開始されました。
高度七十メートルS（エス）形旋廻指定地着陸が最終の目標でした。
それから訓練を重ね認定試験には、どうにか一発で合格し、いよいよ二級滑空士が現実の物となったのです。
それから間もなく、「お前達は今日までの訓練の成果をもって国にご奉公しなければならない。敵連合軍は、日本の数倍の勢いで、次から次に前線へ飛行機を送っているが、搭乗員は粗製乱造の搭乗員で、我が軍の様に一騎当千の飛行機乗りはいない。君たちには、只今から軍用機の搭乗員として訓練を受けて欲しい」と指導員から配布されたのが海軍甲種飛行予科練習生の受検願書であったのです。
私を含め全員が、滑空学校で受けた訓練の延長くらいにしか思っていなかったと思います。皆嬉々として願書を書き提出したものです。
願書を提出した者は、滑空学校卒業証書であったか、修了書であったかは覚えておりませんが、それを受け取って久しぶりの故郷への里帰りとなりました。
生家に着くと、私の帰郷より一足早く予科練の受験日指定の通知が両親の元へ送られていたのです。
試験は、地域合同の受検場になっていた私の出身母校で行われました。日を違えて二次試験まで受け、後日、宝塚海軍航空隊への入隊通知が届きました。
何もかも瞬く間の出来事の様な気がしますが、準備等全て両親任せで、入隊の祝いや方々への挨拶もそこそこに入隊日を迎え、学友、ご近所の皆さんに出征兵士の見送りと同じく「バンザイバンザイ」の声に見送られて広島駅を発ったのです。
宝塚の駅から航空隊の正門まで続く桜の並木道を通り、正門脇に咲く満開の桜の木の下を潜り、ついに娑婆と決別し、海軍甲種飛行予科練習生第十六期生としての第一歩を宝塚海軍航空隊に踏み入れました。
入隊翌日から、適正検査等第三次試験とも言える厳格な体格検査が行われました。
後日不合格で帰郷させられた者もいたと聞いています。
三日も経たず、滑空学校とは月とスッポンほども違う軍隊生活を味わう結果となりました。連日、息つく間もないほどの怒号と号笛とラッパ、それに容赦なく飛んでくる鉄拳、罰直と称する体罰、殴られても、蹴飛ばされてもこの青白いひ弱な部類の私が耐えられたのが、不思議と言う他はなかった気が致します。
予科練での毎日は確かに過酷といえるほど猛訓練の連続でした。
足が地に着いていない空の上では、一つのミスが、即命とりになってしまいます。だから地上のようにミスしたらやり直しと言う事が出来ないのです。
一回のミスが、それまでの文字通り血のにじむような訓練の全てをだいなしてしまうだけでなく、自分の命が奪われるのです。
そしてそれは、選ばれた極少数の大空の飛翔を夢見る者に非情にも課せられた宿命なのです。
予科練時代は、消灯ラッパを聴きながら歌の文句にあるように故郷を想い、両親兄弟を想い出し涙する様な、のんびりと郷愁に浸る心の余裕も時間もなく、床に入るとまるで泥水のように爆睡したものです。
故郷や家族への郷愁を感じるような時間が持てたのは、かえって戦場である実施部隊に配属されてからだったものです。
数か月が経過したころ班長から呼び出され、今後の希望を問われました。私は、一日も早く実機に乗りたいと希望を述べました。
すると分隊長から入隊前の実績（滑空学校）を考慮して、新兵教育を現段階で打ち切り、実施部隊で訓練を受けるよう決まったことが告げられました。
間もなく同期生総員に見送られ、引率の上官に連れられ数名の者と一緒に実施部隊へと向かう列車に乗り込んだのです。
この時、驚いたことに同行した予科練生は全員私より三期も上の先輩ばかりでした。

出発の時点では何も知らされませんでしたが、目的地の駅に着き、迎えに来た車上で、始めて行く先は大分海軍航空隊、第十二航空戦隊・ウ一一〇飛行隊であることが告げられました。

そこは教育隊でなく実施部隊であり、今後は練習用滑空訓練に励むよう指示されましたが、全容もわからず、行く先についてはたいして気にも止めなかったのです。

大分航空隊に着任してまず連れていかれたのが、飛行場に隣接して建てられていた第十二航空廠の工場の傍のかまぼこ型兵舎でした。

翌早朝から空襲警報、しばらくして飛行場の方から爆音と激しい銃声が聞こえてきましたが、第十二航空廠の人達は誰一人あわてることもなく、平常勤務についていました。

後で聞くと第十二航空廠の建物は三方を小高い丘に囲まれており、さすがの敵さんも襲えないのだと聞かれて納得しました。

次号に続く

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略)(単位千円)

令和2年9月15日～11月11日

五　清水香代子(一般)愛知
五　磯部　恭子(一般)静岡
一〇　(株)アートボックス
五　岡本　正人(甲14)埼玉
五　酒井　陽太(一般)東京
五　樋口　三郎(甲13)新潟
二〇　磯貝　孝子(一般)神奈川
五　三浦　昇(乙21)三重
五　久保田健一(乙13)宮崎
一〇　今井アサ子(乙18遺)群馬
五　柴田　一弥(乙19)神奈川
一〇　濱村　守(乙遺)東京
二　加賀谷有里(一般)茨城
五　宮本　登(乙19)北海道
五　都築　倍彬(甲13)遺大阪
五　坂本　宣久(乙21)東京
五　森戸　政一(乙24)栃木
五　川崎　一善(甲13)千葉
二十万円　予科練二十四期会
世話人代表　岩舘芳雄
十三万五千一一六円
海原会理事長　菅野寛也

海原会へのご芳志誠に有難うございました。

事務局日誌

七月

三十日
事務局不動産販売勉強会
於　事務局
安井副理事長、平野理事が出席して、野村不動産アーバンネット(株)の営業担当者との意見交換を実施

八月

十一日
行方参与取材受け
於　雄翔館

三十日
海原会所蔵庫整備作業
於　武器学校
徳永支部長、湯原理事が参加し、改修が完了した所蔵庫の整理作業を行った。

九月

一日
OB会幹事長面談
於　ホテルフィット土浦会議室
平野専務理事が、小野幹事長と面談し、海原会の現況を報告した。

二日
広報班長説明
於　広報班事務室
平野事務局長が、広報班長に対して雄翔園整備計画の概要について説明した。

十日
安井副理事長来事務局
於　事務局
事務局の移転要領等について、平野専務理事と意見交換を行った。

十二日
小林会長より脇差寄贈
於　予科練平和記念館
小林会長から寄贈していただいた脇差を、平野事務局長が受領した。

十月

九日
武器学校OB会幹事会
於　武器学校
酒井副理事長が参加した。

二十日
PSB(光合成細菌)培養要領講習会
於　武器学校
平野事務局長、湯原理事が参加

「予科練」第462号1・2月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（毎月奇数月1回1日発行）
令和3年1月1日発行　発行人　菅野寛也
編集人　保坂俊雄
発行所〒[illegible]
公益財団法人　海原会
東京都品川区南大井6－16－12
（大森コーポビアネーズ）
郵便振替　00140-9154332
TEL☎03-3768-3351
定価500円

お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地をご案内致します。

東京都・足立区
舎人浄苑

0.90㎡～
東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近くの都心でも希少な好環境の霊園。

東京都・港区
高輪メモリアルガーデン

0.45㎡～
都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。

東京都・町田市
町田いずみ浄苑 フォレストパーク

0.90㎡～
緑豊かな武蔵野・横浜みなとみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。

東京都・八王子市
東京霊園

3.00㎡～
四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。

お葬式

家族葬から社葬まで、おまかせください。

花で送る家族葬

ご家族だけで、または親しい方だけで気兼ねなく送りたい。そんな想いにお応えする10名様程のプランです。花祭壇は「風」と「癒」の2種類から選べます。

10名様用
会員価格　580,000円～（+税）

自社総合式場から提携斎場まで、豊富な式場をご案内できます。

- おおのやホール小平　0120-57-2222
- フューネラルリビング横浜　0120-40-0785
- 常光殿斎場（千葉）　0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所　0120-79-8008

お仏壇

ライフスタイルに合わせた祈りのかたちをご提供します。

海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀（祭壇費用）・お仏壇を
会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓	お葬式	お仏壇
墓所工事 10%割引	祭壇価格から 20%割引	25%割引

お問合せは、海原会事務局へ　☎03-3768-3351

株式会社メモリアルアートの大野屋は
甲飛十四期生　元海軍一等飛行兵曹　大澤靜雄の次男　大澤靜可の経営する、お墓・お葬式・お仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋イメージキャラクター　市川ひろみ

メモリアルアートの大野屋

大野屋テレホンセンター
葬儀のご依頼（緊急ダイヤル）24時間受付
「仏事・葬儀・お墓に関するご相談　(9:00～20:00)」
0120-02-8888

メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp

全優石